



教育通信

MANABIのひろば

玉村町ふれあい教室

対象 学校へ行きたくても行けずに困っている小・中学生
日時 毎週月～金曜日
 9:00～16:00
場所 役場西側「ふれあい教室」
 ☎・☎65-0091
 小・中学生の不安や悩みを受け止めながら、心がふれあう喜びを体験する場所です。

玉村町通級教室

対象 ことばやきこえ、情緒面で心配のある3歳以上の幼児や小・中学生
 発音の誤り・ことばの繰り返し・ことばの発達が遅い・落ち着きがない・人とうまくかわれない・学習に偏りがあるなど
場所 役場西側「玉村町通級教室」
 ☎20-4500

玉村町教育相談室

内容 子どもの心の問題など
日時 毎週月～金曜日
 9:00～16:00
申し込み 電話で随時
場所 役場西側「教育相談室」
 ☎65-0081
 ☎65-0091
 お子さんの教育の悩みなど、ひとりで悩んでいないでお気軽にご相談ください。

子ども教育・子育て相談

内容 子どもの心身の発達にかかわる心配ごと
日時 毎週月～金曜日(祝日を除く)
 9:00～17:00
 第2・4土曜日
 9:00～15:00
申し込み・問い合わせ先
 子ども教育支援センター
 (県総合教育センター)
 ☎26-9200

「気づき・考え・実行する」玉中生 ～JRCリーダー研修を通して～

玉村中学校

今年度と次年度、玉村中学校は県で2校の群馬県青少年赤十字実践推進校に指定されました。その一環として、日本赤十字社群馬県支部のスタッフの方をお招きして、リーダー研修を行いました。参加者は生徒会本部役員と各クラスの正副会長です。内容は、プログラムを通して、青少年赤十字の態度目標である「気づき・考え・実行する」を体得することです。具体的には、竹ひごなど限られた材料を使ってできるだけ高いタワーを作るという過程の中で、互いの意見を伝え合う意義と重要性を学ぶというものです。プログラム後の正副会長の感想です。「自分のクラスがよりよくなるためにどうすればいいかよく考えさせられる時間でした。今まで僕は『クラスが明るい＝よいクラス』だと思っていたけれど、そうではなかった。一人一人が自分の意見を言葉で表現することのできるクラスが、よいクラスなのだなと思いました。そのため、クラス一人一人がよい意見をもてるクラスにしたいと思います。」

この後に、教師ではなく正副会長が計画を立て司会を担い、同様のプログラムを各クラスに対して行いました。授業の最後では、生徒同士がお互いによい言動を認め合い、正副会長はどのようなクラスにしていきたいかなどを伝えました。授業後の生徒の感想です。「1回目にタワーを作るとき、意見を言っている人と言っていない人がいて、タワーを作ることによって夢中になってしまっていました。でも2回目は意見を全員が言っていて、手立ての『意見を伝え合う』ことを意識することができていたなと思いました。普段意見を出せない人も意見を出したり、お互いの言動を書き出す時間もあったので、新たに気づくことがあったりと、楽しみながら絆を深めることができたと思います。四五行事などのクラス一体となる場面でこの団結力が大切になってくると思いました。」身に付けた3つの力を、さらに磨き上げていきたいと思っています。



「少年の主張」玉村町代表の作品を紹介します

日頃の生活を通じて、自分の考えや感じた思いを中学生が発表する少年の主張玉村町大会が7月6日、文化センター小ホールで開催されました。玉村中学校と南中学校の代表の生徒3名ずつ、計6名が自分の持つ意見を訴えました。甲乙つけがたい優れた発表の中、玉村中学校3年生の寺田明日美さんが玉村町代表として選ばれ、8月4日に開催された中部地区大会に出場しました。そのときの発表の内容をご紹介します。

恥ずかしがらずに一言を

玉村中学校 寺田 明日美

「おはよう」「いってきます」「ただいま」「おかえり」。何気ない毎日の、取り留めのない家族への一言。反抗期の頃の私には、ただそれだけの言葉でさえ、口にできませんでした。

当時の私は、家族と話すことさえ、面倒だと感じていました。恥ずかしいとも思っていました。中高生になってくると、そのように感じている人は、きっと少なくないのではないのでしょうか。しかし、感謝の気持ちを伝えたり、何気ない、家族との日常の会話を交わすのは、いつ、どんなときでも、できることではありません。私は、それをみなさんに伝えるために、「家族がいるのは当たり前」という考え方が、崩れたときのお話をしようと思います。

私は、中学2年生の時、親との関わりが面倒だな、と感じていた時期がありました。その時期は、父とも母とも、あまり会話を交わしていませんでした。話しかけられても、適当に返事を返す。そんな日が、何日も続いたある日の夜、父が、私たち3姉弟を部屋に集めました。私には、4つ上の姉と2つ下の弟がいますが、私は姉弟と仲が良かったので、その日も部屋に集められたとき、楽しく何かを話していたと思います。

父は部屋に入ってくると、「言葉で伝えるのは難しいから」と言って、私たち一人ひとりに手紙を手渡しました。普段から口数の少ない父でしたが、手紙をもらうのは初めてのことでした。ですので、普段からあまり会話を交わさないと、手紙をもらうというのは、少し恥しいところがありました。

父が部屋から出ていくと、私たちはそれぞれ手紙を読み始めました。封筒には丁寧な字で「寺田明日美様」と書かれていました。私は封筒から手紙を取り出し、ゆっくりと読み始めました。

私は柔道部に入っています。父も柔道をやっていたので、それについてのことが、多少書かれていました。普段は話さないような細かなアドバイスもありました。いつもなら聞こうとしていなかった言葉も、自然と受け止めることができました。

しかし、私は次に書かれていた文に、目を奪われました。「私はパーキンソン病という脳の難病にかかっています。すぐに死ぬような病気ではないのですが、治療法が見つからないので、薬を飲みながら、リハビリを続けています」とのことでした。この文を読んだ後、少し頭が混乱しました。

パーキンソン病とは、脳に少し異常が出て、体が思うように動かなくなる病気です。父が病気だと分かったのは、私たちに伝える半年前だったようです。当時父は、右手と右足が悪い状態でした。

当時まだ9歳だった弟には、その事実を受け止めるのは大変だったようです。手紙を読んだ後、母の膝の上で、泣いていたのを覚えています。

しかし、父は「今を心配していても仕方がないので、一生懸命生きていきます。未来を心配するのは無駄なことです。これからはゆっくりと、周りの人への感謝をしようと思います」と前向きなことを書いていました。

この手紙を読んだ後、私の心が黒雲に覆われたようになったのを覚えています。その原因は、今まで父に対してとっていた態度と、交わした会話の少なさへの、後悔の気持ちだったと思います。「家族がいるのは当たり前」そんなふうに思っていたことを、ひどく後悔しました。

何気ない家族への一言。それは、何気ない家族との日常の会話の中にあり、自分と家族との関係をつくる、大切な言葉です。家族はいつでもいるわけではなく、いついなくなってしまうかさえ、分からないのです。私はそれに気づけず、家族という存在がおびやかされて初めて、それに気がつきました。それから私は、少しのあいさつから家族への対応を少しずつ変え、しっかりと会話をするようになりました。少しずつでも、構わないのです。伝えるべき時に、伝えるべき言葉を。恥ずかしがなくても、その一言で、自分も相手も、少しだけでも幸せになれるかもしれません。



学校教育課 ☎64-7713

教育委員会HP (町のHPから入れます)
http://www.town.tamamura.lg.jp/